1.　はじめに

　その身近さにもかかわらず、よくわからない。あまりに近くにあるがゆえに，わたしたちはかえって，アメリカを正面から見られなくなっている。自由と平等をかかげるこの社会は，人種差別や移民排斥にまみれている。性的な自由を謳歌する人びとととともに、妊娠中絶禁止への道をつける人びとがいる。科学技術は最先端を行き，合理性を尊ぶが，宗教右派が巨大な力をふるいもする。圧倒的な豊かさと貧しさが同居する。民主主義の理念を世界に説く一方で，しばしば軍事力で世界を圧する。これだけの矛盾が露呈しても，驚くべきしたたかさと高潔さとで社会に変化をもたらそうとする人びとが次々に立ち上がる。アメリカはすいごいのか，ひどいのか。個々の事象は見聞きしていても，全体像を描くことはできるようで，できない。

　このとき，わたしたちがすぐに参照してしまうのは日本だ。「日本はアメリカと違って…」とすぐに言いたがる。ある者は社会変革を求めるアメリカの人びとに感銘を受け，また別の者は，大人しい日本社会にこそ安堵する。各々が都合の良い鏡を仕立てて，アメリカそのものは見据えない。こうして極端に揺れるアメリカ像のなかで，結局，〈アメリカ〉はわたしたちのもとから気づけば足早に逃げてしまう。

　どうしてアメリカをつかまえられないのか。それはおそらく，わたしたちがひどく凡庸な近代化モデルをもとにして，アメリカ像をつくりだしているからである。近代のお手本として信じすぎて，あるいはその対極に位置づけて，アメリカの歴史と現実をとらえられないからである。この視座そのものをチェックせねばアメリカは見えない。考えよう，本書はこう誘いたい（藤永康政、松原宏之編『「いま」を考えるアメリカ史』ミネルヴァ書房, 2022 年，ⅰ - ⅱ 頁）。

2.　日本におけるアメリカ史研究の歴史

中野聡「アメリカ史研究の現状と課題」『立教アメリカン・スタディーズ』32，立教大学アメリカ研究所, 2010 年, 9-20 頁

・「研究する「私」が、アメリカ人でもなければ無国籍者でもなく、どうしようもなく日本というネイションに絡みとられた存在でしかあり得ず、（中略）「日本（人）」による「アメリカ史」研究の来し方行く末に関心を持たざるを得ないのも事実だ」, 9 頁

・「しかし、気になることがある。「日本」から発信される歴史学としての「独自の視点」が後退または解体しつつあるのではないか、という問題である」, 10 頁

・ヘボン（A. Barton Hepburn）寄附講座（1918 年）

：日露戦争後、将来の日米戦争の可能性が取り沙汰されるなかで、日米関係を憂慮し

た銀行家ヘボンの提案により発足。高木八尺（たかぎやさか）らが中心となり東京帝国大学法学部で開講し、「アメリカにおけるデモクラシーの盛衰を学ぶことによって、日本におけるデモクラシーの発展に何らかの寄与をされようという、明確な目的意識」をもつ。

→「しかし、日本において「デモクラシー」が肯定的に受けとめられる時代はすでに終わりかけており、日本の西洋史学がアメリカ史を無視・軽視するなかで**アメリカ史研究は傍流の学問として茨の道を歩まなければならなかった**」, 13 頁

・立教大学アメリカ研究所の発足（1939 年）

:「総力戦体制が否定の対象としたアメリカの自由主義・民主主義の内在的理解をめざし、建国史や建国期の思想史と取り組むことは、**思想課題としてアメリカを受けとめるという意味で勇気ある良心的な選択であった**」, 13-14 頁

・中屋健一『アメリカ史研究入門』弘文堂, 1952 年（1968 年改訂増補版）

:「わが国におけるアメリカ史の研究は日まだ浅く、ヨーロッパ史の研究と比較してみても、その研究成果は遠くこれに及ばない有様」, 10 頁

・清水知久・高橋章・富田虎男『アメリカ史研究入門』山川出版社, 1974 年

:「筆者たちが**帝国・帝国主義の「打倒に向けての日米民衆の協力強化」**を望んでいることを宣言」, 11 頁

・有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編著『アメリカ史研究入門』山川出版社, 2009 年

:「**「今、なぜアメリカ史を学ぶのか？」**と問い、その答えは、「それを発する人が属する時代、階層、思想的立場、性別、世代などによって異なるだろう」と述べる」

→「反帝国主義という「ポリティカル・スカラーシップ」の情熱がこめられた「旧版」と比較すると、やはり、**「日本」というネイションを背負った歴史学という立場性（ポジショナリティ）を意識して発信される「独自の視点」が後退したことは明らかである**」, 12, 15 頁

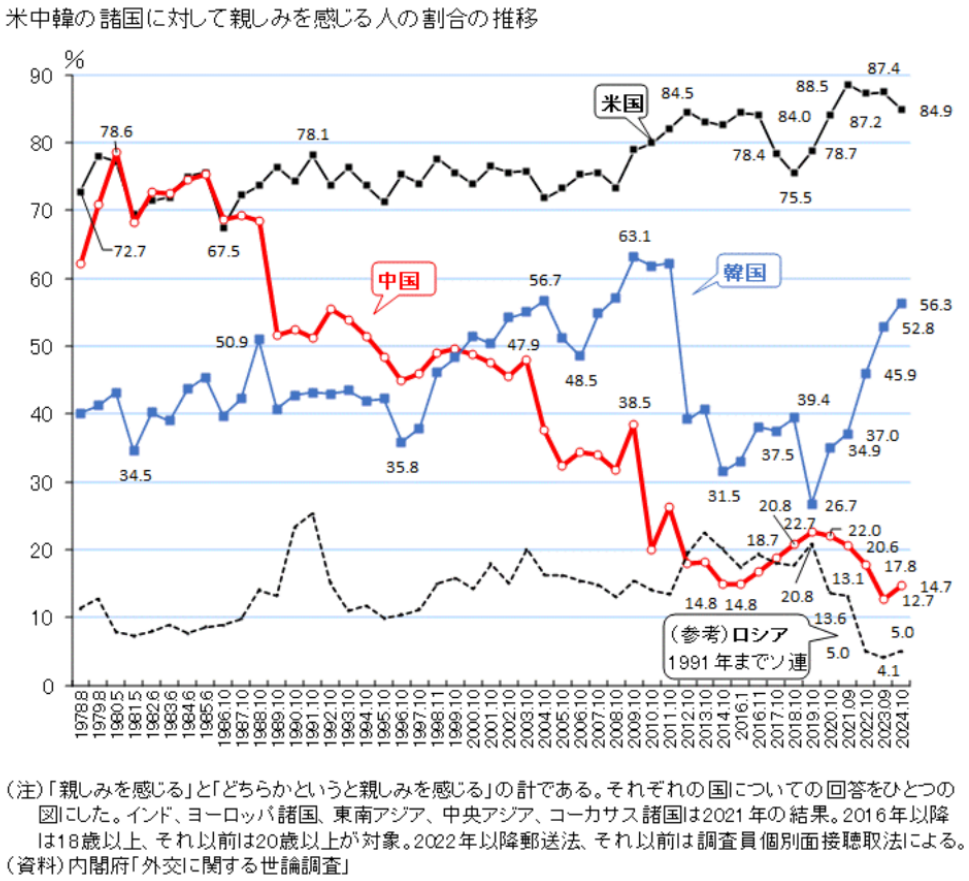
・「**歴史学は、政治学や文学以上に近代国民国家の枠組から自由になりにくい研究分野である。**政治学は理論へと突き抜けていく可能性をもっているし、文学は作品（個人）を通じて普遍に至る道もあるだろう。これに対して、ネイションやナショナリズム、エスニシティといった構築が現実を動かしてきた時代である近現代を対象とする以上、それらを語らない歴史学は単なる空理空論になってしまうかもしれないからだ」, 18 頁

・「まず必要なのは、自らがアメリカ史研究者である以前に歴史学の研究者であるという（当たり前の）アイデンティティを構築することだ。**アメリカを語る方法として歴史学を選ぶのではなく、歴史学を語る方法としてアメリカを選ぶ、あるいは自分の研究の中でアメリカを対象ではなく部品として扱う。**こうした姿勢を、さしあたりの戦略として考えても良いのではないだろうか」, 18 頁

3.　わたしたちの「内なるアメリカ」という無意識：アメリカを考える前提

吉見俊哉『親米と反米：戦後日本の政治的無意識』岩波書店, 2007 年

・社会実績データ図録



https://honkawa2.sakura.ne.jp/7900.html

・「政治的無意識」＝「**戦後日本人の日常意識のなかにある歴史的に構成された無意識的な次元**」, 25 頁

・「戦後日本人は、**「アメリカ」という優越的な他者のまなざしと結びつくことで、アジアとの関係を忘却しつつ、新たな自己を立ち上げていったのだ**」, 20 頁

・室伏高信『アメリカ』（先進社, 1929 年）：「**今や「アメリカ的でない日本がどこにあるか。**アメリカを離れて日本が存在するか。アメリカ的でない生活がわれわれのどこに残っているか」, 46 頁

・「概括するなら、**近代日本の人びとにとってアメリカとは、モダニティそのものだったようにも思われる**」：58 頁

・「すなわち一方で、六〇年代初頭まで全盛をきわめた外国製テレビドラマは、占領期に『ブロンディ』が描き出していた家庭像を引き継ぎ、浸透させていた。しかし他方、テレビという装置はそれ自体、「三種の神器」の一つとして戦後の住まいの中心に入り込んでくる過程で、アメリカニズムの強力な触媒となってもいた。テレビだけでなく「家電」をめぐる大衆的イメージには、アメリカンな生活の追求とナショナルな主体の構築が表裏をなして示されていた。**ここでは「アメリカ」を追い求めることが、「主婦＝奥さま」としての、あるいは「技術者」としての、ナショナルな戦後的主体を立ち上げることでもあるという等式が成立していた**」, 205 頁

松下電器産業宣伝事業部ほか編『松下電器宣伝 70 年史』松下電器産業, 1988 年

・「七〇年代半ば以降、このプロセスのいわば臨界面で、**「親米」と「反米」という対抗自体が、人びとの意識に浮上しなくなっていく時代が来る**。「反米」という立場自体が、リアリティをもたなくなる時代といってもいい」, 232 頁

・「八〇年代、「クリスタル」な日常を生きる日本人は、**もはや「アメリカ」を明確な限界や輪郭を持った他者として措定できない。それは空気のように日常に浸透し、自己を構成しているのだ**」, 233 頁

4. 〈世界〉としての「アメリカ」

吉見俊哉『アメリカの越え方：和子・俊輔・良行の抵抗と越境』弘文堂, 2012 年

・「「アメリカ」は、20 世紀半ば以降、19 世紀からの西欧や日本の帝国主義とその軍事システムを引き継いで膨張していった**地球規模の超国家的な機構である**。そしてそれは、今なお 21 世紀資本主義最大の依代であり続けている。だからその「アメリカを越える」ことは、過去半世紀の軍事独裁や戦争はもちろん、日本の帝国主義や西洋列強の植民地主義の時代を越えて、さらに近未来に出現するかもしれない新たなる大国主義の時代をも越えて、**つまりこれらすべての過去 150 年の〈近代〉を越えて**、その彼方に広がるアジアの未来を見通すために、どうしても必要な回路なのである」, 185 頁

5. アメリカ史から読み解く共同体論：今後のテーマ

① フェデラリストの苦悩：中央政府創設議論と合衆国憲法

・A.ハミルトン他著, 斎藤真, 武則忠見訳『ザ・フェデラリスト』福村書店, 1991 年

・和田光弘『シリーズアメリカ合衆国史①植民地から建国へ：19 世紀初頭まで』岩波書店, 2019 年

② トクヴィルが見たアメリカにあるアメリカ以上のもの：民主共同体

・A.トクヴィル著, 井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治』講談社, 1987 年

③ 死の収穫：南北戦争による国家分裂

・貴堂嘉之『シリーズアメリカ合衆国史②南北戦争の時代：19 世紀』岩波書店、2019 年

・アレックス・ガーランド『シビル・ウォー：アメリカ最後の日』, 2024 年

④ アメリカ帝国史：反転する「自治」の論理

・中野聡『歴史経験としてのアメリカ帝国：米比関係史の群像』岩波書店, 2007 年

・カルロス・ブロサン著, 井田節子訳『我が心のアメリカ：フィリピン人移民の話』井村文化事業社, 1984 年

⑤ 国家に忘れられた人間の社会史：公民権運動

・本田創造『アメリカ黒人の歴史』岩波書店, 1964 年

・中野耕太郎『シリーズアメリカ合衆国史③20 世紀アメリカの夢：世紀転換期から 1970 年代』岩波書店, 2019 年

⑥ 理念国家の隘路：セルフビルドマンからホワイト・トラッシュの絶望死

・藤永康政、松原宏之編『「いま」を考えるアメリカ史』ミネルヴァ書房, 2022 年

・古矢旬『シリーズアメリカ合衆国史④グローバル時代のアメリカ：冷戦時代から 21 世紀』岩波書店, 2020 年

⑦ 補論：沖縄戦後史